

国税庁が全国から募る「税に関する高校生の作文」コンクールで、日ノ本学園高校(姫路市香寺町香呂)2年のクバツキ咲雪さん(16)が優秀作品12編に贈られる最高賞「国税庁長官賞」に輝いた。同校からは同じく2年の玉田智愛さんと安田圭伽さん(17)が、それぞれ姫路税務署長賞と近畿税理士会姫路支部長賞を受賞。同税務署によると、同一校から3人が同時に選出されるのは珍しいという。(船田翔太)



税の作文で受賞した(左から)安田圭伽さん、クバツキ咲雪さん、玉田智愛さん  
=姫路市香寺町香呂

## 日ノ本高生 3人受賞

### 高校生 税の作文コンクール

同コンクールは、高校生に作文の発表を通して税への関心を深めてもらおうと、国税庁が1962年度から毎年実施。今年は全国約1500校から約17万3千編の作文が寄せられた。

13歳までニュージーランドで過ごしていたクバツキさんは、同国と日本では「税」の受け止め方が違うと気付いた経験を作文にまとめた。ニュージーランドでは病院での診療や治療が全て税金でまかねられるなど身近な存在で、「税は社会を支えるためのもの」との意識が広く根付いていたという。一方で、日本では「税金=取られるもの」との印象を持っている人が多いと感じたという。

作文では「税は、私たちの生活を支えるための大切な仕組み」と強調し、「道路や橋の整備、福祉や災害対策など、どう使われているのか」にも目を向けていた。

クバツキさんは、昨年実施された国民

代表にも選ばれるなど多才な一面を持つ。日本に移り住んだ当初は、学校の国語の授業で苦労したが、教師の母親の助けを借りながら漢字の読み書きや文法の勉強に励んできたという。

今回の受賞について、クバツキさんは「スポーツと同じで、負けず嫌いな性格のおかげかな」と分析。「作文を通して税のことを知つてもらい、どんな人たちの役に立っているのか考えてほしい」と話した。

姫路税務署長賞を受賞した玉田さんは、幼い頃に小児がんを患い入院中、友人に会えず孤独に苦しんだ経験から、作文では、家庭的な環境の中で重い病気の子どもをケアする「こどもホスピス」への税金による支援の必要性を訴えた。近畿税理士会姫路支部長賞に選ばれた安田さんは「アプリなどを利用して税金の使い道を国民が簡単に確認できるようにして関心を高めたい」とつづった。

クバツキさんの作文は、国税庁のホームページに掲載されている。